

「すまうら文庫」という建築



文庫をつくったひと
建築家 石憲明さん

斜めの面が織り成すユニークなシルエットは、まるで船のよう。扉を開ければまたがりりと表情を変え、穏やかな光とたくさんの本に満ちた温かな空間が広がります。子どもも大人も自然と長く居座ってしまう、すまうら文庫の秘密。その背景には、随所に散りばめられた建築家 石さんのこだわりがありました。



かたち

「船」に着想を得て

水平・垂直という概念に囚われず、まるで船先のように毅然と空に伸びたかたち。屋根と壁とが美しく一体となり、どの方向から眺めても印象的な外観が生まれた。斜めに切り取られた窓や、腰掛けて外が覗ける小窓も子どもたちにとっては楽しい仕掛け。



お話の部屋

物語の世界へいざなう別空間

廊下を隔てた部屋は、ろうそくの灯の下おはなしの会が開かれる。斜めの壁と天井に囲まれた小さなスペースが効果的に作用し、絶妙な居心地のよさを演出する。窓の先のウッドデッキに、シンボルツリーであるどんぐりの木から実が落ちると、カランコロンと音も嬉しい。

SUMAURA BUNKO



天井

想像力を邪魔しないフラットさ



本棚

斜めの壁を活かす

室内に独特な空間の広がりを生み出す、傾斜のある壁。本が手に取りやすいよう子どもの視線を重視しつつ、本棚も傾いた壁に沿って若干のズレをつけた階段状に。

船の中のような、あるいはサメのお腹にいるような？子どもたちの自由な想像力を存分に膨らませるべく、天井に取り付ける照明はできる限り排し、極めてなめらかに。グラフィカルなデザインの間接照明と、窓からの自然光が温かく空間を包む。

子どもたちの感性に呼応する空間体験を

子どもたちなら、この建物を何と形容するだろう。ゴツゴツした石？ 折り紙を折って作った船？

壁が空に向かって斜めに突き出たその力強いフォルムは、住宅や道路に囲まれた街中で唯一無二の存在感を放ち、いつでも凜とした佇まいを見せている。すまうら文庫の建て替えの際に建築を手がけた石憲明さんは、その「かたち」に徹底してこだわった。幼少期に存分に本に囲まれるというかけがえない体験にふさわしく、子どもたちの感性を揺り動かす、奥深い記憶にしっかりとアプローチする存在でなければならぬ。モチーフとしたのは

「船」だった。船は子どもにとって親しみ深いテーマであり、海を目の前にした須磨という立地にしっかりと馴染む。屋根と壁を同一素材の平面のみで構成し、軸を斜めに振ることにより、想像力をかき立てる立体的な造形が生まれた。

「じつは、僕が林さんと最初に出会ったのも客船の上だったんです。偶然の出会いでしたが、話しているうちに仲良くなって、当時まだ建築を学ぶ学生だった僕に『将来建てるときはお願ひね』と言ってくれた。それから8年ほど経って、『いよいよ実現したい』と連絡があつて。普段子どもたちが体験しにくい〈斜めの壁〉という案



たくさんの方が集う様子を見て、「地域に対して意味のある使われ方をして、やっと建築が生きてくると石さんは語る。すまうら文庫を知らない人も思わず足を止めてしまうのが、この建築の力だ。

石さんの“わたしの一冊”



石憲明さん

建築家。兵庫県生まれ。2005年一級建築士事務所 seki.design 設立。林さんとの初めての出会いから8年後、2008年に手がけたすまうら文庫は「神戸市都市デザイン賞」を受賞した。2人のお子さんを連れ、家族揃ってすまうら文庫に遊びに来ることも。



『ぼくを探しに』

作：S・シルヴェスタイン
訳：倉橋 由美子
講談社 1977年

を提示したときも、林さんは即決でしたね。『壁こけてんの、おもしろいやん！』って。だから、のびのびと自由に設計させてもらえました。よく羨ましがられるんです、こんなに思い通りにできることなんてなかなかないですから」

この〈箱舟〉の中に今日も子どもたちが乗り込んでいく。ぎっしりと本の詰まった本棚から一冊を見つけ出し、新たな物語の世界へと旅立つのである。